

水浅葱の夏

C G D Em C G D Em

Em 画像アブリふと見たら D おいぶん前の

C Am G B7 この日の思い出として

Em D C Am G おそらく南の島プライベートで訪れた海岸

G D D G 水浅葱の海 夏の日

G D D G 砂の上に風 滑ってた

C G D Em 波打ち際 遠い記憶

C G D Em 心のどこか そっと撫でてゆく

D Em D そっと思い出さずあの日の感情

Bm Em 楽しい時間 やがて過ぎる

Em D 砂浜の匂い どこか優しくて

Bm Em 触れられなくな... ヒンヨにまで

波は光をのせて 寄せてきては

正首に触れては 流れて

歩くたび 足跡が 水に溶けて 消えてゆく

水浅葱の海 夏の日

砂の上に光 映っては消える

波打ち際 遠い記憶

心のどこか そっと撫でてゆく

そっと思い出さずあの日の笑顔

楽しい時間 やがて過ぎる

遠くの島影 眠る獣のように

その日の終わり 見守っている

Capo. 3 1-マル An
Capo. 0 オーサン Gm. Cm

夏の日、目覚め

5 3 5 3 0 3 0 5 3 3 0 3 0 5
An G An G En G En An An G An G En G En An
まだ起きたくはない 朝早く目覚めた夏

5 3 1 0 5 3 1 0
An G F E An G F E
二度寝で見た夢 バニのこる

3 10 10 3
C Dm Dm C
どこか寂しい どこか懐かしい

5 1 10 1
An F D F
硝子の向こうに映る

3 1 3 3 夏がゆっくりとほじまて
G F C G
川は陽を抱いてる

10 0 1 3 1 3 1 0 5 0 鉄橋くじり抜けてゆく
En F An F G En An G An
川の上を赤い列車が

まだ起きたくはない 朝早く目覚めた夏

小さな扉 心に響く

どこか寂しい どこか懐かしい

赤い列車が渡りゆく
列車の音 遠くへ広が

風が少しだけ笑う
その音を優しく返して

誰もいない 朝の時間に

まだ起きたくはない 朝早く目覚めた夏

夏の日が始まりに やわやかに抵抗する

どうして気づいた時には
An G An A G F G F En En Dn G
An Dn An F# 5 7 C#

どうして気づいた時には C#

そこには誰もいなくて
Bn 7 F# Dn An En G

遠くの後ろ姿を
Bn An C#

呼びとめることもできず
Bn G 7 F# En An Bn

* ついさっさとでいたあなたの
C# F# G C#

微かな温もりも消えてゆく
Bn An F# G C#

用意していた言葉も
Bn An G 7

置き忘れたままに
F# C#

取り返すにはあまりに遠く **
5. Bn 5. 5 7 Bn 7 5 F# 5 F# 7 0
Dn An Dn F# G An G F# F# En G C#

どうして気づいた時には

何処を追い求めている

誰かがくれた囁き

受けとめることもなくて

ついさっさとでいた誰かの

気配の名残が漂っていた

小さな空洞の中

胸の奥にしまっている

取り返すにはあまりに遠く

(甘〜**)

Capo. 4 1-マール + ナツシビル

オープンD

(F#)

断捨離

E_n G A₇D
とまわくものないから 手放したいからE_n A₇
無理をしないところで 手放してみようD E_n
ものすごく好きでも 大切でもないものはE_n A₇
わからなくなる前に 手放してみようD E_n A₇ D
霧が晴れるような気持ち 晴わってみたいD E_n G D
だから何となくが 煩わしくなってD E_n A₇ D
本当の自分を知りたくて はっきりするためにD E_n A₇ D
もっと確かなもの ビンにあるのだろうかD E_n A D D E_n A D
忘れてしまいたい 身軽になるために

1-マール + ナツシビル

複雑が毎日に とらわれることもなく

無理をしないところで 片付けてしまおう

ものすごく好きでも 嫌いでもない人は

別れてしまう前に 離れてみよう

たくさんの思い 詰め込んで 生きることではない

過去にすがる気持ちも 断ち切ってゆきたい

守るべきもの知りたくて 確認するために

長高い生き方を見つけてゆくんだ

いつかはサヨウが来る 怖さをなくすために

忘れてしまいたい 気軽になるために

流れる景色

Em D C B7 Em D C B7

Em 放射線に広がる D 窓から流れる G 景色

Em 両脇の緑の視界に D 白い筋が失ってく Em B7

Em この夏最後 D 遠出の道を

D7 運転席で揺られて Em

Em 明日で終わる D 休みの最後

D7 ハンドル握りしめて Em

D どれだけ走っても G この瞬間 G Am やがて消える

D こんなにさみしくても G Am その思い G 通りすぎる

G 空と同じ C D 道の白さが G

G 最後の暑さ C D この身 焼きつくる G

助手席と後ろの席 静かで動いてない

一人つけるワイヤレスホン 手探りのモバイル光る

色々あった 今年の夏も

それぞれ思い 出に

明日からまた 離れ離れの

息子も寂れ 眠る

どれだけ走っても この瞬間すいに 終わる

こんなさみしくても その思い 通りすぎる

少し弱まる 空の日差しが

最後の暑さ フェイドアウトに

ate. 126 6.29

Capo. 4 1-2. L Am
Capo. 2 オープンD

C#m

アサギマダラとヒヨドリバナ

B_n 7 5 5 B_n 7 5 5
Am G F Dm Am G F Dm

「もう行くよ」とアサギマダラ
ヒヨドリバナの房 微かに震わせ

風の縁で たたむ羽の中
いくつもの光

その色は遠い空の色を帯びていた

ここに咲くあなたの香りは
私の旅の道しるべだった

「遠くへ行けばもう届かないでしょう」

ヒヨドリバナうつむき 細く影伸ばして

白い房をひそかに揺らして

届かぬ年のように

アサギマダラ 答えず

ただ風を吸い込む

「この香りを最後の記憶に」

あざやかな羽 空へ溶けゆく

「その羽のどこか 私の香りが」

残ってること 静かに願う花

少し冷えこんだ初夏から

G D Em C G D F# C

少し冷えこんだ初夏の

雨の日々は通り過ぎて

隠れてた本当の夏

確かにやってきた

厚手のTシャツでいびらく

過ごしてきた日々と共に

時折ひんやりとした

感覚どこにもなく

G D Em C Am G D D7
この空から落ちる光が Ah

G D Em C Am D7 G D7
薄い雲を突き抜けてくる

ダブル台風がいくつか

通り過ぎてゆくたびに

雲がたくさん吹き飛ばされ

熱れた風流れくる

街を一気に強い光が Ah

夏の色にサッと塗り替え

この空を支配する光が Ah

あの涼しい 遠い記憶に